

## 『悪について』

中島義道著／岩波新書

昨年、秋葉原で大量無差別殺人事件が起こり、多くの関心を集めたことは記憶に新しく、そのような「悪」について詳細な検討がなされた本と想像されるかも知れませんが、全く違います。著者はそのようなタイプの「悪」については、本書において（他書においてさえ）殆ど言及することはありません。著者が矛先を向けている「悪」は、平々凡々、公明正大、時には小心翼翼とした一般市民の中にこそあります。例えば、身体の不自由な人とか老人が横断歩道の前で戸惑っているとき、人知れず手を引いて道路の横断をサポートし、名のることなく立ち去るという行為の中に著者は「悪」を見出す。この本はそれがなぜ「悪」に通じるのかを詳細に解説しています。もし、それが「悪」ならば、何をしたら「悪」になるじゃないか、と問い返したいところですが、その通りです。“我々は「悪」を成すことなくしては、何事をも成し遂げることができない”ということになるようです。従って、自分の行為には「悪」が一滴もないと思っている人（すなわち一般市民）こそ告発され、糾弾されるべきであるとの主張が展開されていきます。“自分には「悪」はない”とまで断言できる人もまた居ないでしょうが、しかし、“自分が行っている行為には「悪」は絶対はない”と断言できそうなケースはあります。前述した横断歩道の例もそうです。“気をつけよう、だれかを傷つけていないか”とか“バスのお降りの際にはお忘れものにご注意下さい。”などの放送もそうです。しかしこれらの行為はすべて自己愛というフィルターを通過しているものであり、そのため「悪」に直結するということになるようです。これらの考えは著者が専門とするカント哲学から導き出されたものであり、本書でも難解な用語が数多く用いられて読みにくさは否めませんが、さりどて専門家だけを対象としているわけではありません。私はこの本に赤線を引きながら2回ぐらい読みましたがまだ十分理解できているわけではなく曲解しているところがあるかも知れません。またあと数回は読まなくてはと思っています。

著者の中島義道さんですが電気通信大学教授で、カント哲学の研究者であると同時にその実践者（すなわち哲学者）でもあり、日々、一般市民の中の「悪」を告発し続ける「戦う哲学者」と見なされている人です。戦う相手が一般市民であり、かつ氏が告発する対象が大部分の市民には承認されているものも多いです。

---

氏の主張は一見常識と正反対となることが多く、このため本人に対する批判もネット上で見ることができます。私は、平成20年の夏ごろ氏の別の著作を大学の売店で求めてパラパラと読んでいくうちにその内容に驚倒し、芋づる式に10冊ぐらい読みました。そのうちの1冊がこの『悪について』です。出版されている本はいずれも一般市民を告発するという意味で首尾一貫しており、どれを読んでもいいのですが、ここでは『悪について』を挙げさせてもらいました。他の著作では意図的に（営業用の）爆笑・哄笑を混ぜるような場合もありますが、この本は岩波新書だけあって笑いは少なく、難解な部類に属します。私も一般市民ですが、一般市民である皆様に是非一読をお勧めします。なお、氏をまねて哲学者になることはけしてお勧めできません。

## 執筆者紹介

### 細山田得三

環境・建設系准教授。専門領域は、水工学、流体工学、沿岸海洋学、海岸工学。

【書名】 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格  
『悪について』 中島義道著 岩波新書 2005年 735円

[ブックガイド目次へ](#)